

私の幼児教育論(三)

清水 美智子

私はこのごろ、聴覚障害や言語障害をもつ子どもたちとつき合う機会が多く、この子どもたちの育ちを導く教育活動を吟味していく必要に迫られているが、この仕事をしていると、人間の一人である自分が日常あたりまえのように使っていることはの働き、読む、書く、話す、聞くといったことばによる活動、コミュニケーション、思考作用等を、改めて考察の対象とせざるを得なくなる。ことばは何を伝えうるのか、人間がことばの機能を獲得していく上で、またそれを十分に使いこなしていく上で必要欠くべからざるものは何なのか、ことば以外の自己表現機能はいかに重要な役割を果しているか等、ともしれば、私たちおとなが、とくに公教育担当者が表面的に流してしまいがちなことどもに改めて疑問をもち、その根本にさかのぼって考えることを余儀なくされる。いわゆる障害児(者)にかかわる問題を考えることは、このように私たち自身の問題をとらえ直すことにつながるののであるが、私はこういう視点から幼児の教育も見つめようとしている

る。そのように私を深く考えさせる問題の一つに、きくという活動及びよむという活動の性質がある。ここでこれを取りあげるのは、前回に述べた、目に見える世界と目に見えない世界とのかわりに及ぶからである。

“よむ”という活動について

よむとはどういう活動か、と問うに、そこに二つの異なる性質のものを見出すことができる。文字をよむ、文章をよむという側面と、文章をよむ、文字・文章によってあらわされている書き手の心・思想をよむという側面である。両者は一つのように見えて実は同一のことではない。もちろん文字がよめるということは、文意がよめ、書き手の心・思想をよみとることのできる一つの前提条件ではあるが、必要十分な条件ではない。そのことは、私もでも、書物を読んでいて字面を追うだけで少しも内容がよめなという場合が往々にしてあることから察することができる。ま

た、現実には文字はちゃんとよめるのに本をよまない子ども、本をよむたのしさを知らない人間もたくさんいることから、文字がよめることと、文字によってあらわされている世界に自分の心が入りこむことができることが直線的につながっていないことがわかるだろう。

教えられる側面と教えられない側面

ここで私がいいたいことの一つは、文字をよむことは、一定の手順で簡単に教えることができる、それも早くに三歳頃からできるといふことである。各文字の形態を弁別し、それと音声との結合をおぼえることは、人間の子どもには大変やさしいことのようにある。たまたまそれ以外のものとおもしろいことに興味をもった子どもは、文字をおぼえるのは遅くなるにすぎない。最近相ついで私が相談をうけた例では、いく分知恵おくれであると診断できる六、七歳児三名は、いずれも三歳頃から文字に興味をもちおぼえているし、書くこともしている。このように弁別し記憶する作業を教えるのはきわめてたやすいことである。また、単純な文章をよませたり、個々の単語や文節の組み立て方を教えることもやろうと思えば簡単なことである。一定の手順で組織的に教えていくことができる。これらはいずれ正しい基準がはっきりしてい

ることであり、形式そのものあるいは、形式にのったものであるからである。

これに対して、後者の側面、文字によってあらわされている書き手の心・思想をよみとるといふ精神活動についてはどうだろうか。一定の手順で容易に教えうるだろうか？ 一体何をどのようにして教えることができるのだろうか？ 少なくとも私には教えようとしても教えられないところがあるように思えるのである。

そういう精神活動（よむという活動）を育てるように配慮することはできるが、教えこむことはできないのではないかと思うのである。何故なら、ここでいう「よむ」とは、書き手の心をよみとろうとするよみ手自身の主体的な精神活動であり、いいかえれば、書き手とよみ手との心の交流、コミュニケーションだからである。そのよみ手がどんな心でよむかによって、同じ書物、同じ文章表現も異なる意味をおびてくる性質のものである。私自身がかつてよんだ書物を何年ぶりかでよみ返してみても、新たな意味や疑問を発見したり、全く別なよみ方のできる自分におどろく経験をする。また大学の教師である私は、学生たちに私の指定した書物をよませてレポートを書かせてみると、三十人いれば厳密には三十通りのよみとりがある。一冊の本に対してこういう多様なよみとりがあることが私にはおもしろく、それを材料にして、私のよ

みとりを含めて異なるよみとりを交流させ、互いに自分と異なる他者のよみとりから学び、各自の考えをねり直しよみを深めていく機会にしていくのが、教師である私の責任だと思っている。そこでは、私がある学生のよみとり方に疑問を出しその理由を述べて討論していくことはできるが、教師である私のよみとり方を唯一の正しいよみ方として教え憶えさせることはできない。事実、私自身が全く気づいていなかった新鮮なよみとりをする学生もあり、私の心の窓がまた一つ開かれたような思いをすることもしばしばであるし、一冊の書をよむという活動がいかに奥深く、個人の内面に根ざしているはたらきであることかを教えられる。ここでいう“よむ”という活動は、全くその人の経験の総体に依存している純粹に個人的なことなのである。

“よむとは何か”を子どもから学ぶ

前述のように、私は学生やそれより幼い子どもたちとのつき合ひの中で、自分の既成の枠組をつきこわされるような思いを何度もしてきたのであるが、そういう経験の一つをここに例示して、具体的に理解して頂こう。これは会話の中で示された二年生（七歳四か月）の女兒の“よみとり”である。

「いろんな人の一生のことを書いた話（伝記もの）をよんで、

わたしがわかったことの一つはね、人の一生は長くないな、短かないな、ということなの」と話し始める。広い道を歩いている時だったので、その道の五十メートルほど先を指さして、

「ここから向うのあの辺までの感じやね、短かい短かいね、Fくん（一年生の時、事故で急死された級友）やったら、もっともっと短かいたった七年の一生やから、こののすぐそこまでで終ってしまったわ。そんなに人は長いこと生きられないことがわかるし、だからわたし、たくさんいいことをしておきたい、後悔しないで死ぬるようにね。いい生き方できたな、と思えたら、ゆっくり静かに死ぬるでしょ、だけど悪いことやしたら死ぬるとき後悔するやろね。自分は何のために生きたのかな、こんなんやったら生まれてこなかったらよかったと思っで、あわてて死なんならんね、ゆっくり静かに死ぬないね……」

（一九七二年二月）

実をいうと、私はこのときまで子どもに伝記ものをよませ、ことにあまりよい意味をおいていなかった。何となく教訓的で立身出世主義的なニオイを感じ、好感をもっていなかった。そういう偏見を私はもっていたのだ。しかしこの子どもが、たとえば新美南吉の童話に感動すると新美南吉の一生を書いた本をよみたり、ベーターペンの伝記をよむとそこに出てくるモーツァルト

やハイドンの伝記もよみたがるというふうになんかと求めてくるとき、私はこの子どもの心が何を求めているのかよくわからなかった。ただ、読んでいてしばしば、「ブーやっぱり死なはった」と感慨をもらし、また死の方にも関心をもっていたことには気づいていた。今、この時になってみると、この子どもは、よんでいるうちに人が生まれいかに生きていかに死ぬかということに深い関心をもつようになったのではないか、そういう大きな注意を向けずらによむようになったのではないかと思われる。級友の急死という自分の日常生活における直接的経験と複合してくるとき、そのよみはさらに深められたようである。ここで誤解のないようにいっておくが、このような読後感をもったからといって、この子どもがこれ以後いわゆるよい子になると期待するのではない。人間の心の問題、その成長の過程をそんなに短絡的に皮相的にとらえる誤ちを最も戒めねばならない。

大切なことは、この例で示されるように、よむ人のその時の興味・関心(問題意識)のいかんによって、また他の日常的経験との複合によって、何をどのようによみとるかという可能性は変わってくる。よみとりの可能性は無限にあり、「よむ」という活動の奥深さと幅の広さを認めることである。眼に入ってくる文字の列や文章構造は同じであっても、また声を出してよませれば音声符

号としては同じにきこえても、よむ人がそこから感じとること考えることは同じではない。文字をよんでいるのは眼であっても内容をやんでいるのはその人の心である。ここでいう「よむ」とは、文字の行をよむのではなく、むしろ行間をよむことにほかならない。これが私のいいかかったもう一つのことである。

この本はこうよむべきだ、このようによまねばならないと、おとなが前もってきめてよみ方を教えるというようなことは本来、不可能だしナンセンスであるのみでなく、もしそういう一定のよみ方を強いるように導かれてしまったら、その子は枠にはまったよみ方に従い、うけうりするだけになってしまふだろう。子ども自身の深いよみとり、新たなよみとりを育てていく妨げになり、子どもの心の成長の可能性をつみとってしまうことになるのではないか。

行間がよめるように心を育てたい

目に見える文字の行を手がかりにして、目に見えない心・思想をよみとっていくのが、行間を「よむ」という活動である。文字学習及び文法学習は技術的なことである。すべからず技術的なことはその教え方をきめて指導し、教えた効果(技術の上達度)をたえず評価できる。けれどもいかなる技術も、最終的にはそれが

人間のどのような心でもって使われるか、どういう目的で使われるかによって評価が変ってくる。このことは、現代文明のもつすぐれた最先端の科学技術が両刃の剣であり、それが本当に人間の幸せのために使われるか否か、科学技術を使いこなす人間の心の問題（哲学）が現代の人間が直面している大きな課題であることを思うとよくわかるだろう。

ひとりひとりの人間がもつ「文字がよめる」という技術が真によく使われるように願うなら、私たちは一つのことば、一つの文字からも深く感じる心、行間をよみとれる想像力、文字を媒介にして書き手と対話していけるひらかれた心などを育てていくことに熱心であらねばならない。技術の習得をすすめる道はたやすく、カリキュラム化しやすいのに対して、技術を高度に使いこなす心・思想・感情を育てていく道は、平坦な一本道ではない。近道はない。みんなが同じ歩き方をするはずはない。歩調がちがってあたりまえだし、ちがった道を辿って同じ方向に向うこともあらず。

どろんこあそびや砂あそびの感触、落葉や石ころのある庭でしゃがみこんで気に入ったのを拾い集め、胸をわくわくさせた経験、冷たい風を頬いっぱいにながら木に登り、スリキズだらけになってもまだやりたいと思うほどの爽快感、あのあそびに加

わりたいのになかなか入っていきなくて切ない思いをした経験……等々、異なる彩りの諸経験がどの子にも必要だし、そういう時々自分の心をゆり動かした経験を思わず語りかけたくなるような、（子どもの心が語りたいことをきいてくれる）おとなが身近にいるとき、子どもの心はどんなに広く開かれ、どんなに深く耕やされることだろう。親や保育者が無感動に情性で生きているようなおとな、自分の外の何か（カリキュラムとかよせ集めの知識とか大義名分とか……）にしばられて動いているおとなである場合にはこの一番大切なことができない。子どもが自分の気持ち・経験を人と共有できる喜びをたしかにもつとき（おとなが子どもの表現のよううけとめ役、対話の相手になれるとき）、子どもは人と交わる幸せを感じ、自らも人の表現（人の気持）をよくうけとめようという方向に心を向けていく。心と心のふれ合う人間関係のもち方を、このようにして子どもは経験から学びとっていくのである。心と心のふれ合う人間関係こそ本当のコミュニケーションであり、「よむ」という活動の奥深さ（行間をよむこと）も、書き手とよみ手の間に文字を媒介として、このような心のふれ合うコミュニケーションがどれほど成り立ちうるかにかかっているのではないだろうか。人間の成長・発達は誕生以来一貫して人と人との交わりの中で達成されていく。だから、子どもがどのよう

な人間関係のもち方を学んでいくかは重要なことである。けんか
をしないようにしつけられ、集団からの逸脱を最も悪としてみん
なと同じことをするように教えられ、出来上った知識を憶えるよ
うに仕込まれ、いわれた通りにあそぶように管理されて育つと
き、子どもは形式的表面的な人間関係のもち方を学ぶ。子どもの
心は耕やさず、ほんとに心動かされた経験をもたず、自分がほ
んとにやりたいことは何かを見つけることもなく、あるいはそう
いった経験をもつても人と共有する喜びを味わうことなく、表面
的に流される生活に陥ってしまう。これでは他者の心を理解しよ
うとする心（共感的人間関係）は育たない。

大分遠まわりをして話をすすめてきたので、これまでの話を整
理してみよう。目に見えるもの、みかけのよさや技術的なことは
すぐ教えられるが、目に見えない内面的な活動である鋭い感受性
や豊かな想像力、深い洞察力は、短かい期間で、単純な図式で、
教えられない。だがたやすく教えられることを軽視し、すぐ教
えられることだけに傾いてしまつてはとり返しがつかないこと
になる。むしろ、一朝一夕に簡単に教えられることだからこ
そ、その大切な心のはたらきをすっかり育てていくように、私ど
もは心をくばり努力していかねばならない。幼児教育にあたる者

は子どもに何かを教えよう、という気構えをもつのでなく、大切な
はたらきを育て、いこう、という心で生活することが必要だと思
う。

幼児期における「きく」活動の意義

文字をよむこと、文字で表現されている心をよみとることが
一体化して育っていくことがのぞましいと考える私は、正確な文
字の習得はもっと後であつても、ちよつど文字に興味をもちはじめ
める幼児期の指導に偏りが無いことを願う。文字への興味は、文
字によってあらわされている心の世界への興味に裏打ちされてい
くように導きたい。小学校高学年になつても、文字はよめるのに
内容のよめない子ども、読書のたのしみをしらない子どもに出く
わすたびに私はそれを願う。

このように導く上で、幼児期には読みきかせ、語りきかせが大
変重要である。子どもの心をひきつけるようなおもしろい話、た
のしい話、しんみりした話、子どもの直接経験を空想の世界で発
展させたような話、語り口の美しい昔話など、子どもに合わせて
選びとっていくとともに、その話の世界にすっかりとけこんで読
みきかせできるように、教材研究を深めていってほしい。既に考
察したように「よむ」とは単に文字をよむことではないのだから

ら。

その際の子どもの側の活動は、「きく」という活動であるが、「聞く」と「聴く」を区別してとらえねばならない。聴くというのは単に耳で聞くのではなく、心で聴くのである。子どもを行儀よく坐らせ、前もってこちらに注目させ静かにきくようにと準備して、いわば「聞くこと」を外から強制することはできる。しかし、聴く活動はどうしても強制できない心のはたらきである。私たちでも、「うわの空できく」ということがあるように、体がそこにも耳を傾けて聴いているとは限らない。聴くというのは全く心理的内面的なはたらきであり、きき手の心が話し手あるいは話しの内容にひきつけられてはじめてよく可能になる。はじめは横むいていても、手で何かいじりながらきくともなくきいていたのに、次第に話にひきつけられていくこともある。外からしばらくられてできる活動でなく、全く主体的な活動であることに留意したい。それゆえに、聴き方や聴いた効果をすぐ評価することもできない。まことにこの点でも聴く活動とよむ活動とは心理的に共通の性質をもっていることに気づく。行間をよむことにつながる心のはたらきを、幼児期においては聴く活動を通して育てていくことができるのではないかと私は思っている。

主体的な聴く活動を通して、幼児は日本語の表現の美しさ、多

様性、語感のゆたかさなどをいつのまにか学びとっていきける。くり返し聴いているうちに内容の理解はより深まっていく。物語の底に流れている心・思想にふれることもできるようになる。内容にふさわしい日本語の表現のしかたも何となくわかってくる。また読みきかしてもらっている本の内容にひかれるところから、本っておもしろいものなんだな、自分もよみたいな、よめるようになりたいなという欲求を強くもつようになる。かくて文字・文章をよむことが促進されることはあっても阻害されることは決してない。

くり返しの重要性

聴くという主体的な活動の奥深さは、よむという主体的活動のそれにつながっている。「読書百遍、意自ずから通す」というのと同じで、心ひかれた物語を生活の中で全体をくり返し聴く経験をもつことは、すぐれた作品であればあるほど大切である。聴きとりによる理解の深さを高めていくのは、テレビ時代の今日、とくに重要ではなからうか。すなわち、テレビから多くうけとめることの多い最近の子どもたちにも欠けている経験の一つは、自分が興味をひかれたことを何度もくり返し求めていく欲求の充足ではなからうか。一度でわかることなど、ほんのわずかな表面的なこ

となのに、わかったつもりになってしまふのは大変危険なことである。ただ単に、ある話の筋を知っているというだけでは、子どもに内在する知的欲求は満たされていないと私は判断する。何度もうくり返し読んでもらいたがる子どもに接していると、その求めているものがわかるからである。そういう子どもは何事についても表面的に知るだけでは満足しないようになっていく。そういう子どもに育ててほしい。

外からみれば（よむ者にとつては）、全く同じくり返しであつても、聴く子どもの内的経験としては全くの同じくり返しではない、一回ごとに新たな確認があり、発見があり感動の深まりがあるという点で、つねに変化を含んでいる経験の過程であることを見逃してはならない。ここでもまた、外側の目に見えるところだけで判断するのではなく、目に見えない心の世界的内的経験をとらえることがぞまれる。

成長しようとする子どもが何を求めているか、その内的欲求を見抜けないおとなが、あるいはそれを無視し抑圧して、全くピントはずれのことをやって「教育」と称していることが現代では余りにも多いのではないだろうか。

私は数年前、一年生の男の子が作文の中で「……どこへいって

もきまりばっかりだ。きまりはあつてもいいけど、ちょっとおおすぎる。未来になつてもしきまりがなくなるのなら、今すぐなくなつたほうがいい。そしていろいろおもいきつてやってみたい……」といったことを書いているのを知つて愕然とした。そのときの担任の先生の書いたコメントが「きまりがあるからぼくたちはのんびりくらせるのですよ」というのを知れば、いかにピントがはずれているかわかるではないか。この男の子の心の叫びを私もはしっかり聴こうではないか。この子は実に健康な精神をもち、たくましい成長へのエネルギーをみせている。けれども、幼児教育が義務教育に近いほどに普及してきている今日、すでに幼児期から、内的欲求を抑圧されつづけている子どもたちがふえてくるおそれがある。この子のような心の叫びをあげうるほど、健康な精神もたくましい成長へのエネルギーも育たないことだつてあり得るのである。

なぜ幼児教育が必要なのか、子どもたちにどのような人間として生きていってほしいと願つて自分は幼児教育にたずさわっているのか、保育者の一人一人が問い直す時点に来ているのではないか。経済の高度成長時代に過熟しはじめた幼児教育は、今や反省期に来ているのではないだろうか。

（終り）

（大阪教育大学）